令和６年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 13	公益目的事業　19
主査名	金　利昭　茨城大学名誉教授	
研究テーマ	都市内道路の将来ビジョン選択に関する研究	

研究の目的：

交通分野の将来ビジョンはどれを見ても個別施策･要素技術を網羅的に取り込んだ総花的ビジョンに見えるし、対立するビジョンは不明である。将来ビジョンは単なる理想ではなく、実現するための政策・施策に反映されなければならない。すなわち将来ビジョンは、実現させるものと実現を諦めるものとを対比させた価値判断であり、優先順位をつけた政策・施策の集合としての社会選択の問題として捉えるべきと考える。本研究は日常生活圏にある都市内道路を対象とし、特に自転車通行帯に着目した「道路交通の自転車ビジョン」を将来社会の選択あるいは価値の選択の問題と捉え、対立するビジョン（代替案）の選択問題として分析して、昨今の「将来ビジョン」に問題を提起する。

研究の経過（4 月～3 月）：

研究会メンバーは都市交通計画や自転車計画策定に詳しい 13 人で構成した。

４回の研究会（9/27、10/17、3/6、3/10）と３回の個別打ち合わせ（8/15、10/3、3/31）を行った。研究会ではゲスト講師を古倉宗治氏（特定非営利活動法人自転車政策・計画推進機構　理事長)、村野清文氏（公益財団法人自転車駐車場整備センター自転車総合研究所長）に依頼し、道路に関わる現場の問題から法制度、計画策定まで広く話題提供を頂いた。

「道路交通の自転車ビジョン」に関して WEB 意識調査を実施した。

研究の成果（自己評価含む）：

①EU 諸国の自転車計画には明確なビジョンがあり、ビジョンを実現するために政策・施策に優先順位をつけて実行しているのに比して、日本国のビジョンは総花的であり政策・施策の優先順位が不明で、人々の生活や行動の変容が見えない。②自転車利用の個人的・社会的メリット・デメリットを整理した上で、それを反映した「道路交通の自転車ビジョン」を三案提示した。③WEB 意識調査を用いて「道路交通の自転車ビジョン」対する人々の受容性を分析した結果、自転車の車道混在を推進するには賛意が弱いこと、車道混在の安全性不安を払拭することが課題であること、具体的にメリット・デメリットがわかるビジョン（代替案）の提示は賛意へ繋がること、さらにビジョン（代替案）の明確な理解にまで至れば自転車活用施策への賛意は激増すること、安全不安が根強い車道混在よりも自動車いじめを伴う中速帯は賛意を得られる可能性があることが判明した。④自転車推進シナリオを考察した。自転車の位置づけや優先順位、扱いに関わる考え方・哲学を示した自転車ビジョンが要となる。その中で自転車の利活用の将来の姿を含めて、移動スタイル、ライフスタイルなどを具体的に描いて将来の都市と人間活動の姿、個人のライフスタイル、ウェルビーイングのあり方を示すことが人々の共感を得るために必要である。そしてビジョン達成に向けて人々に行動変容を促し社会にトラジションを引き起こすためには、自転車のメリット・デメリットを具体的に明確に示し、人々や地域の類型に応じて自動車抑制と自転車利用推進をセットにした方策を提示する必要がある。

今後の課題：

自転車推進シナリオを深化させ､人々の行動変容と社会のトランジションを引き起こす実践的研究が課題である。